

ドミニク・レステル『肉食の哲学』の書評

浅野幸治

ここでは、昨年に邦訳が出版された、ドミニク・レステル『肉食の哲学』大辻都訳（左右社、2020 年）を批評する。より正確には、レステルは倫理的菜食主義者（＝動物権利論者）を批判しているので、動物権利論の立場からレステルの所論に反論する。

レステルは、第 1 に、倫理的菜食主義者（＝動物権利論者）を批判する。倫理的な菜食主義者とは、倫理的理由で肉食を拒絶する者、すなわち「肉を食うことが感覚ある生物を苦しめ、殺さなくてはならないから」（20 頁¹）肉食を拒絶する者のことである。倫理的菜食主義は、現代では、動物の権利の主張と結びついている²。動物の権利の主張とは、レステルによれば、「動物も利益不利益の主体」（20 頁）なので、動物は「ヒトに食われない権利を持つ」（21 頁）というものである。

第 2 に、レステルは、工業的畜産に反対する（111 頁、137～138 頁）。そうすると、レステルは、動物福祉論の立場から動物権利論を批判しているように見える。しかし、そうでもない。動物福祉論は、動物を殺して食べることが許されるという立場である。レステルの主張はそうではなくて、動物を殺して食べることが人間の義務だというのである（13 頁、87 頁、105 頁）³。この意味でレステルは、倫理的肉食主義者ないし積極的肉食主義者だと言える。この倫理的肉食主義と動物福祉論がどう違うかといえば、動物福祉論によれば、動物を殺して食べることが許されるだけではなくて、動物の肉を食べないことも許される。他方、レステルの倫理的肉食主義によれば、動物の肉を食べないことは人間の義務に反するのである。

¹ 頁数はすべて、レステル『肉食の哲学』の頁数である。

² 正確に言うと、倫理的菜食主義は動物権利論の 1 つの帰結なので、動物権利論と倫理的菜食主義が同一なわけではない。

³ 細かく見ると、レステルは、すべての人間の義務というのではなくして、「西洋人にとって」（13 頁）は義務だと限定しているようにも読める。しかし、それは読者が西洋人だからそう述べられているだけであって、レステルが肉食は東洋人にとっては義務でないと考える理由はない。したがって、レステルの公式の見解は肉食がすべての人間の義務だというものである、と私は考える。

第1節、倫理的菜食主義者に対するレステルの批判

それでは、レステルの第1の主要論点である、倫理的菜食主義者の批判を詳しく見ていこう。

第1の批判

レステルによれば、第1に、倫理的菜食主義者は「ヒトと他の動物の間にアパルトヘイト政策を持ち込む」(44頁)。言い換えると、倫理的菜食主義者は、人間が他の動物と違って特権的に偉いと考える。この思想は、「人間例外主義」と呼ぶこともできる(58～60頁参照)。ただし、人間例外主義は、人間中心主義とは異なるので、注意が必要である。人間中心主義とは、他の動物は人間が利用するために存在するという思想である。他方、人間例外主義とは、動物のなかで人間だけが理性をもった道徳的存在だという考えである。しかしながらレステルによれば、人間は動物である。では、動物であるとは、どういうことか。動物であるとは「苦しみつつ苦痛を与え、脅かされつつ脅かし、嫌悪しつつ嫌悪されること」(80頁)「殺すことと殺されること」(42頁)だとレステルは考えているようである。ところが、倫理的菜食主義者は、「ヒトから動物性を消し去りたいと考える」(13頁)。この倫理的菜食主義者の思考は、レステルによれば、「己の動物的本性」(12頁)を否定するものなので、自己否定的ないし自己矛盾的である。レステルは、次のように書いている。

ヒトの動物的次元は薄暗い過去の遺物に分類できるものではなく、ヒトの本質的な構成要素なのだ。ヒトが動物性を脱する日が来ると信じるなど馬鹿げている。(106頁)

以上が、倫理的菜食主義者に対するレステルの第1の批判である。

上記の批判に倫理的菜食主義者は、どう応えたらよいか。おそらく公式的な返答は、人間が動物であることと特別な道徳的存在であることは両立可能だ、というものになる。しかしながら、レステルと倫理的菜食主義者とでは、「動物性」ということで意味するものが異なる。すでに引用した文章に加えて、レステルは次のようにも述べる。

生きるとは喜び、苦しみを受け取り、また与えることにある。生きるとは他の生ける者に怒り、反対に他の怒りを買うことを意味する。(13 頁)

また人間の動物性に関して次のようにも書いている。

われわれ自身が他の動物の肉からできた動物であり、他の動物の餌になりうる
(105 頁)。

どういうことか。レステルは、倫理的菜食主義者が「生物間の相互関係と交換の普遍的原則」(87 頁)を拒絶すると主張する。この「生物間の相互関係と交換の普遍的原則」ということでレステルは、食物連鎖のことを意味しているようである。レステルは次のように述べる。

動物を食うことを受け容れるにあたり私がとりわけ深く認識するのは、世界には「無償の食事」というものはないこと、すなわち動物でありたいと願うのなら、動物であることが意味する生死のサイクルに関与しないわけにはいかないということである。私は他のすべての動物と同じように、生きるために殺す。
(63～64 頁)

他方、倫理的菜食主義者にとって、人間が動物であるとは、人間と他の動物が同じような器官から出来ていて、快楽や苦痛を感じ、情があるということである。こうした意識現象が発現するためには、少なくとも中枢神経系の発達が必要と思われる。私たちは現にそのような動物であり、適切な教育を受ければ、理性を発達させ、道徳的に成長することもできる。この「動物性」の理解の違いは、第2の批判とも関係するので、次に倫理的菜食主義者に対するレステルの第2の批判を見よう。

第2の批判

第2に、倫理的菜食主義者は、「ひたすら関心を払うべき動物と、たいてい純粹かつ単純に道具と化した植物の間の絶対的な区別」(45 頁)を立てる。動物と植物がどう違うかといえば、すぐ上で述べたように、動物は苦痛を感じ利害の主体であるのに対して、植物は感覚がないので利害を感じる主体ではない。しかし、レステルは、植物にも感覚があり、

利害の主体だと主張する（45～49 頁）。レステルがそう主張する根拠は何だろうか。レステルは、アンソニー・トレワヴァスという植物学者の研究を引き合いに出して、植物にも知性があると主張する。少し引用しよう。

トレワヴァスはアンデス椰子 (*Socratea exorrhiza*) の行動について記し、この樹木が根を誘導しながら光に向かってどのように位置を変え、より日当たりのいい場所を確保するためにライバルの邪魔をするかを示した。……植物はおそらく考えはしない。だが計算し、遭遇する問題に適合するように反応するのである。（47 頁）

植物には脳はないが、学習し、記憶し、決定する。じじつこれらは一個の脳であるかのごとく動いている。（48～49 頁）

あらゆる生き物同様、植物にも利害があり、それを精力的に追及している。（49 頁）

なるほど、植物は生命体であり、栄養摂取をし、増殖する。その構造や行動は実に精妙に出来ていて、賛嘆に値する。この点では、自然一般、特に気象現象が実に精妙に出来ていて、知的に動くと感じられる。またコンピュータやロボットは現に知的だろう。しかし、なにものかが知的だからといって権利があるということにはならない。例えば、飛行機や自動車が知的に動いたからといって、飛行機や自動車に傷つけられない権利があると主張する人はいない。道徳的配慮にとって重要なのは、苦痛や喜怒哀楽といった情、意識現象である。したがって、植物に知性があるとしても、植物が動物と同じようなものだということにはならない。

この点はレステルも認めているようで、レステルは次のように述べる。

おそらく植物には哺乳類とまったく同じ知性はないが、だからといって植物を人間の意のままとなるたんなる対象と考え続けてよいなどという主張は説得力がない。（49 頁）

これは正しい。植物は無機物とは違う。では、植物は人間にどのような道徳的要求をし、人間は植物にどのような道徳的義務を負うのか。残念ながら、この点に関してレステルは、なににも述べていないように思われる。実際に、植物に対する道徳的義務を述べるのは、

難しい。植物は被害を被らないように思われるからである。「植物にも利害があり、それを精力的に追及している」としても、植物はそれを無意識的にしていると思われる。だから、植物は被害の主体ではない。もし人間が植物に道徳的義務を負うとしたら、それは人間の徳性の考慮に基づくのではないかと思われる。たとえば、道徳的に立派な人間は、みだりに植物を殺したりしないものだ、というような節度である。

倫理的菜食主義者にとって争点は、植物をどのように取り扱うかではない。倫理的菜食主義者とその論敵の肉食者とで、植物の扱いは違わない。倫理的菜食主義者も肉食者も普通に植物を食べたり、その他の用途に利用したりする。争点は動物の扱いである。この点もレステルは了解しているようである。レステルは次のように述べる。

西洋のヒューマニストと逆に、ベジタリアンは動物には何をしてもよいとは考
えない (58 頁)。

ここで「ヒューマニスト」と呼ばれるのは人間中心主義者であり、「動物には何をしてもよいと考え」る人間中心主義者こそが倫理的菜食主義者の論敵なのである。例えば、人間中心主義者は、動物を殺して食べてもよいと考える。この点では、動物を殺して食べてもよいと考えるレステルも、人間中心主義者である。ところがレステルは、直前の段落で引用したように、植物でさえ「人間の意のままとなるたんなる対象と考え」るのは説得的でないと述べていた。動物であれば、なおさらであろう。レステルは、動物に対して、植物に対するのとは次元の違う、どのような道徳的義務が人間にあると考えるのだろうか。

いや、そうではなくて、レステルの基本的主張は植物と動物の間に重要な違いがないということなので、植物を殺して食べてよいように、動物も殺して食べてよいというのが、レステルの立場であるのかもしれない。当然ながら、「動物」には人間も含まれる。しかもレステルの主張は、動物を殺して食べることが許されるというのではなくして、動物を殺して食べることが人間の義務だというのであった。かくしてレステルは、次のようにも述べる。

徹底した肉食者であれば、倫理的ベジタリアン同様ヒトの特権を疑問に付すだ
ろう。ただしベジタリアンと異なり、ヒトをも食うべきだと要求して。(41 頁)

ただし、レステル自身が徹底した肉食者であるのかどうかは、明確でない。いずれにせよ、仮に植物に知性があるとしても、植物には苦痛や感情がないので、その点で動物とは道徳的観点で大きく異なる。この動物と植物の区別をレステルはさらに次のように批判する。

第3の批判

倫理的菜食主義者は、肉食者を種差別の咎で批判する。ここで前提となっているのは、倫理的菜食主義者は種差別をしない、すべての動物種を平等に扱うということである。しかしレステルによれば、倫理的菜食主義者は、

一本の草、一匹のミミズ、または一匹の昆虫は一頭の牝牛より重要性において劣ると考えている (50 頁)。

蚊やゴキブリを殺すことは牛を殺すこととは異なるとの考えを受け容れている (51 頁)。

つまりレステルは、倫理的菜食主義者が反種差別の看板とは異なり、「生き物の序列」を導入していると主張する (50 頁)。この批判に倫理的菜食主義者は、どう答えられるだろうか。まず、一本の草が一頭の牝牛より重要性において劣ることは、言うまでもない。草は動物ではなくて植物だからである。では、ミミズや蚊やゴキブリはどうか。倫理的菜食主義者 (= 動物権利論者) によれば、なにものかが道徳的配慮に値するかどうかの基準は、それが苦痛や感情の主体であるかどうかである。これが動物権利論の理論枠組みである。では具体的に世界の中でどの物が苦痛や感情を感じるのか。この問題を考えたとき、世界には明らかに感覚や感情の主体である動物とそうではない植物の他に、感覚や感情があるのかどうかよく分からない動物がいる。貝類や昆虫などである。こうした動物の場合、神経組織のあり方が人間と非常に違っていて、通常は脳がない——ただし脳に相当するものはある——と考えられている。こうした動物の意識のあり方はよく分からないので、倫理的菜食主義者の間でも、こうした動物をどう扱ったらよいのか意見が分かれる。いずれにせよ、正確に言えば、世界は完全に白と完全に黒の二色世界というよりも、白と黒とその中間の灰色に三分される。レステルが指摘する蚊やゴキブリなどの昆虫やミミズは、この灰色部分に入る。だから、蚊やゴキブリやミミズのことをあまり考えない倫理的菜食

主義者がいても不思議ではない。

たしかに倫理的菜食主義者は、この灰色部分についてあまり述べない。それは、この灰色部分が肉食者との争点ではないからである。なぜか。仮に倫理的菜食主義者が灰色部分についてあまり頓着しなかったとしても、肉食者も昆虫などの灰色部分についてあまり頓着しない。その点で倫理的菜食主義者と肉食者は同じであり、肉食者が倫理的菜食主義者に反対する理由がないからである。

倫理的菜食主義者が主に問題にするのは、牛や豚や鶏などの哺乳類と鳥類である。これらの動物には、倫理的菜食主義者は、平等に生命権を認める。ここで生命権は人間の行動を制約する切り札であり、どの動物の生命権がより重いか軽いかということはない。したがって、すべての動物の生命権が尊重されることが理想である。しかしながら現実の世界は理想世界ではない。ときに、ある動物の生命権と別の動物の生命権が両立し得ない悲劇的な状況が起こる。そうした場合、知性がより発達し感情生活のより豊かな動物を優先することが適切だろう。こうした優先は、平等な権利の下でもありうると考えられる。種差別ということに関して、レステルはさらに次のようにも批判する。

第4の批判

レステルによれば、倫理的菜食主義者は、人間が他の種よりも優位に立てると考えるので（52頁）、種差別者である。他方、肉食者は、「あらゆる捕食動物と同じ行動を受け容れ」（52頁）「他のあらゆる種に属する生き物と協調しようとする——すなわち彼ら〔自分たち〕の利益を追求する」（56～57頁）ので、反種差別的である。しかしながら、レステルと倫理的菜食主義者とは、「種差別」という言葉の意味が異なっている。倫理的菜食主義者にとって、「種差別」とは、道徳的に正当な理由がないのに他の動物種に対して他の動物種だからというだけの理由で不利な扱いをすることである。他方、レステルにとって、「種差別」は、自分の種と他の動物種を区別することにすぎないと思われる。レステルの意味での「種差別」には、相手に不利な扱いをするという要素が欠けているように思われる。いずれにせよ、レステルと倫理的菜食主義者とで「種差別」という言葉の意味が違っているので、レステルの主張も倫理的菜食主義者の主張も「種差別」という言葉のそれぞれの意味で成り立つ。その意味で、レステルの批判は、「種差別」という言葉をこ

ういうふうに別の意味で使うこともできるということを示しているだけであって、倫理的菜食主義者に対する批判になっていない。

第5の批判

さらにレステルは次に、倫理的菜食主義者が反菜食主義的だと言って批判する(54頁)。倫理的菜食主義者の考えの中心には、動物を苦しめるのが悪いことだという思想がある。ところが、倫理的菜食主義者は、肉食者から肉食の快楽を奪おうとする。肉食者にとって肉食の快楽を奪われることは苦痛である。つまり、レステルによれば、倫理的菜食主義者は、肉食者に苦痛を与えるから反菜食主義的だというのである。この批判に対する倫理的菜食主義者の答えをレステルはよく了解している。倫理的菜食主義者の答えをレステルは次のように述べる。

肉を取り上げられた肉食者の苦しみは、食われる牛の苦しみに比べたらたいしたものではない(55頁)。

別の言い方をすれば、生きている歓び、殺されない利益に比べたら、肉を食べる快楽や利益はそれほど重要ではないということである。だから倫理的菜食主義者は、牛肉を食べることよりも、牛の殺されない権利を尊重すべきだと主張するのである。

この倫理的菜食主義者の答えに対して、レステルは、主観的快楽の比較不可能性をもって対抗するようである。レステルは次のように述べる。

〔食われないという動物の快楽とその動物を食うわれわれ自身の快楽という〕
互いに相反する利害が同一線上にあると考える理由はない(55頁)。
一杯の牛乳を飲むことがごく心地よい経験であるにせよ、ワイン好きにとってその快楽は、ワインを飲んで得られる快楽とはまるで比較にならない。(56頁)

つまり牛肉好きにとって牛肉を食べる快楽は他の快楽で置き換えできないと、レステルは言いたいようである。たしかに主観的な快楽を比較することは難しい。特に間主観的な比較、例えば私とあなたの間での比較は難しい。ましてや種を跨いだ比較はもっと難しいだろう。それでも私たちは客観的な世界について話さざるを得ない。私について見た場

合、特定の食べ物を食べる快樂よりも、生きる快樂のほうがはるかに大きい。食べ物を食べる快樂は、生きる快樂の一部にすぎないからである。したがって、牛と人間で差別をしないかぎり、牛の殺されない利益のほうが、人間が牛肉を食べて得る快樂よりも重要である。

第6の批判

さらにレステルは、次のように述べる。

もっとも過激な（多少なりとも首尾一貫した）ベジタリアンの一部は……捕食動物の生態を草食や果実食に転換しようと考えている。(57 頁)

動物は皆食われたくないと思っている……この理屈を極限まで押し進めれば、すべての動物に他の動物の殺傷を禁じなくてはならないだろう。(66～67 頁)

真に徹底したベジタリアンはまた、すべての肉食動物がバイオテクノロジーによってベジタリアンになり、すべての肉食動物の「未来の元被捕食者」が今後は捕食者の存在しない生態系のもとで繁殖するような変化を望むはずだ。(81 頁)

これは捕食の問題と関係している。動物権利論によれば、動物には殺されない権利がある。これが、人間が他の動物を殺すべきでない理由・根拠である。では、人間ではなくて例えば狼が鹿を殺そうとしたとき、どうすればよいのか。鹿の殺されない権利を守るためには、狼に捕食を止めさせなければならないのではないか。そのためには、肉食動物を草食動物に変える必要があるのではないか。これが捕食の問題である。けれども、ほとんどの倫理的菜食主義者は、肉食動物を草食動物に転換しなければならないと考えていない。ほとんどの倫理的菜食主義者は、野生動物の生態に介入する必要があると考える。したがって、もしレステルの第6の批判に意味があるとすれば、その批判は、倫理的菜食主義者は論理的に首尾一貫しようとするれば肉食動物を草食動物に転換するという主張に至るといものである。別言すれば、もし倫理的菜食主義者がそういう主張をしないとしたら、それは倫理的菜食主義者が論理的な首尾一貫性を欠いていること、ご都合主義者であることを暴露している、というのである。

この批判に倫理的菜食主義者は、どう応えられるか。倫理的菜食主義者は、動物の権利と捕食への非介入を整合的に組み合わせることができだろうか。できる。その鍵は、道

徳は人間の行為に関わるということである。道徳的概念としての権利に対して道徳的概念としての義務を負うのは、人間だけである。動物は、殺されない権利を人間に対して主張できる。人間は、殺さない義務を動物に対して負う。この権利義務関係は、一方において動物の苦痛感受性に、他方において人間の理性的道徳性に基づいている。言い換えると、一方に苦痛感受性がなかったり、他方に理性的道徳性がなかったりした場合、この権利義務関係は成り立たない。したがって、人間とその行為や性格については、道徳的に善いとか悪いとか言える。しかし、人間のいないところでは、道徳的に善いとも悪いとも言えない。例えば、野生動物の間で狼が鹿を殺して食べたとしても、それは道徳的にどうのこうのと言うたぐいのことではない。

ただし、道徳外の意味では、例えば生態系にとっては、狼が鹿を捕食するのは良いことだと言えるかもしれない。あるいは生態系も変化することを考えれば、生態系を維持するのが良いことだとも言えないのかもしれない。その場合、生態系は自然のままだうなってもいいので、その考え方は自由放任主義である。このように人間と関わらない野生動物については、倫理的菜食主義者は、生態系主義をとることもできれば、自由放任主義をとることもできる。

第7の批判

レステルは次のように述べる。

ベジタリアンは、……ヒトが動物に汚染されることを拒み、……。肉を食うとは動物の肉がヒトの肉に変化することを意味するわけだから、それはヒトの動物化というかたちで捉えられるのである。(58 頁)

しかし、動物の肉を食べることによって自分の身体が汚染されると考える倫理的菜食主義者は1人もいない。実際に、問題は動物を殺したり傷つけたりすることなので、倫理的菜食主義者の中には、動物を虐待しないならば、牛乳や鶏卵を食べることは許されると考える人たちもいる。倫理的乳菜食主義者や倫理的卵菜食主義者である。また、自然に事故などで死んだ動物の肉を食べることも、間違いではない。この点は、レステルも了解しているようである。レステルは次のように述べる。

車にぶつかって死んだ動物をベジタリアンが食べられないという理由はないし、たまたま雷に打たれた牝牛を食うのを禁じられることもないだろう。この主張を敷衍して言えば、食うことを目的とした動物の殺傷を望まないベジタリアン実践者は、自然死した動物を即座に食肉に加工する自動装置を発明してもいいかもしれない。(89～90 頁)

したがって、この第7の批判も倫理的菜食主義者を非難しているように見えて、実は批判になっていない。

第8の批判

レステルは、倫理的菜食主義者の根本的誤りを次のようなところに見てとる。

ベジタリアンが拒んでいるのは、現実世界が本質的に闘いの世界であり、たがいの基本的利害は一致どころかむしろ衝突する傾向にあるとの認識である。(61 頁)

世界からあらゆる残酷さを殲滅するというのは、……非現実的だ。(62 頁)

ベジタリアンは残酷さを純粹に否定的なものとして見ており、その完全な根絶を現実的目的だと考えている。(63 頁)

ベジタリアンの態度には、あらゆる残酷さと苦しみの究極的拒絶がはっきりと見てとれる。だが、残酷さと苦しみをすべて根絶するなど結局できるはずも望めるはずもない。(65 頁)

たしかに、功利主義者ならば、世界からできるだけ苦痛を減らしたいと考えるだろう。究極的には苦痛をゼロにしたいと考えるかもしれない。苦痛をゼロにする確実な方法は、「地上のあらゆる動物的な生を消滅させることだろう」(75 頁)。しかし、そうすると、苦痛だけではなく快樂もゼロになってしまう。これでは、功利主義者にとって元も子もない。功利主義者にとって本来の狙いは快樂を最大化することであり、苦痛の軽減は快樂最大化のための効率的な手段にすぎないからである。

上の引用のうち最初の引用で、レステルは、世界が捕食や競争で満ちているということを指摘しているようである。衝突する利害の例として、レステルは、「ある生物にとって

の食われないという利益」と「その捕食者の食うという利益」を挙げている（61 頁）。たしかに捕食動物の利益と被食動物の利益は衝突する。しかし、このように利益と利益が衝突することは、倫理的菜食主義者の落ち度でも責任でもない。功利主義者ならば、どちらの利益がより重要かを考量しよう、と言うだろう。そこでレステルが持ち出す例は、「イヌイットのように、その集団的アイデンティティの大部分が肉を食うことの上に打ち立てられている民族の文化的利益」と「アザラシにとっての食われないという生物学的利益」である（61～62 頁）。この例では、イヌイットの文化的利益よりもアザラシの生物学的利益のほうが重要である。文化は変わり得るし、イヌイットはアザラシを食べなくても生きていけるからである。ただし、イヌイットがアザラシを食べないでは生きていけない状況では、イヌイットの生存的利益をアザラシの生存的利益よりも優先することが許されるだろう。

一般的に捕食動物の生存的利益と被食動物の生存的利益は衝突する。これは事実であり、この衝突は避けることができない。しかし、イヌイットと同様、人間は動物を食べなくても生きていける。したがって、人間が動物を食べるという利益と動物の食べられないという利益の衝突は、避けることができる。

また、レステルが言うように、「苦痛には本質的にポジティブな面がある」（70 頁）。つまり、快適な価値ある生活のためには、ある種の苦痛が不可欠である。健全な生態系にとっても、被食動物の苦痛は避けられないだろう。被食動物が捕食動物に食べられなければ、被食動物が大繁殖をして、生態系を破壊し、多くの動物により大きな被害が及ぶだろう。こういう次第で、ある種の苦痛は避けることができない。したがって、「残酷さと苦しみをすべて根絶するなど結局できるはずも望めるはずもない」。この点は、倫理的菜食主義者も認める。倫理的菜食主義者が止めようと主張するのは、不必要な加害行為による不必要な苦痛である。避けることのできない苦痛を避けることができないとしても、避けることのできる苦痛を避ける必要がないということにはならない。かくして、この第8の批判も、倫理的菜食主義者を非難しているように見えて、実は批判になっていない。

第9の批判

さらにレステルは、倫理的菜食主義者を次のようにも批判する。

ベジタリアンはお気楽にも逆の幻想を抱く。彼らは世界においてヒトが例外となり、他の生物を殺すことも害することもなく完全に自給自足的な方法で生きられると信じたいのだ。(64 頁)

これは、レステルによれば、幻想である。現実には、第 1 の批判に関して引用したように、「世界には「無償の食事」というものはない」からであり、「動物でありたいと願うのなら、動物であることが意味する生死のサイクルに関与しないわけにはいかない」からである(63～64 頁)。ベジタリアンのこの幻想をレステルは、次のように丁寧に説明してくれる。

徹底したベジタリアン(流行に乗った「表層的な」ベジタリアンに対して「深遠な」ベジタリアン)は動物でも植物でもない遺伝子組み換え食品しか摂取しない覚悟で闘争しなければならないはずだ。あるいはより正確に、真に一貫したベジタリアンは、ヒトを動物の影響下から抜け出させ、(バイオテクノロジーやナノテクノロジーの恩恵により)どんな生物も捕食せず、光合成のみで栄養摂取できる新奇な有機体に変化させるために闘うはずだ。(81 頁)

たしかに、そのような野望は幻想だろう。

しかし残念ながら、倫理的菜食主義者は、そのような幻想を抱いていない。レステルが適切に指摘するように、人間は植物ではなくて動物なので、「他の生物を殺すこと」なく生きることはできない。たしかに植物を殺して食べることなく生きることはできない。しかし植物を殺すことと動物を殺すことの間には道徳的に大きな違いがあつて、人間は動物を殺して食べなくても生きていくことができる。したがって、この第 9 の批判も倫理的菜食主義者を非難しているように見えて、実は批判になっていない。

第 10 の批判

さらにレステルは、次のようにも述べて倫理的菜食主義者を批判する。

私は……相当数の動物が今も捕食で生きており、われわれ自身もこうした狩猟のおかげで生き延びてきた面があることは確信している。これほど広くおこな

われ、種の間力学において大きな役割を果たしてきた行為を倫理に反するなどと考えることができるのだろうか。(64 頁)

言うまでもなく、この文は修辞疑問文で、レステルは、捕食が倫理に反するなどとは考えられない、と主張するのである。たしかに自然界において捕食は大きな役割を果たしている。そして例えば狼が鹿を捕食することは、すでに述べたように、倫理に反するわけではない。倫理・道徳は人間の行為に関わるからである。だから、狼が鹿を捕食することは、倫理的に善くも悪くもない。しかし人間は自分の行為について反省し、動物の基本的利益・権利を尊重するべきだということが分かる。この道徳的な視点から行為することができるのが、人間の特徴である。したがって、狼が鹿を捕食することが倫理に反しないからといって、人間が狼の真似をするべきだということにはならない。

第 11 の批判

さらにレステルは、次のようにも述べる。

農業もまた野生のエコシステムを破壊し、そこに生きる動物を害する。……真に徹底したベジタリアンなら、すべての農業行為は動物たちが暮らすエコシステムを破壊しているのだから、自ら採集したものだけを食すべきである。(67～68 頁)

これは正当な論点である。人間が自然の土地を開墾し農地に変えるとき、すでにそこに暮らしていた動物の生息環境を破壊する。仮にそのときに動物が殺されなかったとしても、動物は土地を奪われ、追い出される。これは、動物に対する権利侵害かもしれない。しかし他方で、動物に他に十分広い土地が残っているならば、人間が土地を私有化することは許されるかもしれない。また人間が生きていくために必要であれば、人間が土地を獲得するために動物を殺すことも道徳的に許容されるだろう。

この関連でレステルは、次のように述べている。

ベジタリアンは(バクテリアや蚊などからの) 防御のためなら殺してよく、他の選択肢がある場合は食うために殺してはならないと考えているらしい。(67 頁)

ここでもレステルは、倫理的菜食主義者の考えを適切に理解していると思われる。この倫理的菜食主義者の考えに対して、レステルは、次のように述べて反対する。

だがこの主張は自明のものではない。(67 頁)

しかしレステルは、どうしてこの主張が自明のものではないのかを述べていないように思われる。レステルが示唆するのは、次のような論理である。

- 1、他の選択肢がある場合には、人間は動物を殺すべきでない。
- 2、ところが、農業は他の動物を殺す。
- 3、また農業をしなくても、人間は自ら採集したものだけを食べて生きていける。
- 4、したがって人間は、農業をしないで、自ら採集したものだけを食べて生きていくべきである。
- 5、ところが、そんなことをしたら、「地球の人口が一千分の一だったとしても、恒久的に飢餓状態に置かれる」(68 頁)。
- 6、この帰結は馬鹿げているので、出発点である 1 の前提が間違っている。

しかし、5 の帰結の不合理性が示すのは、3 で述べられた他の選択肢が現実的に存在しないということである。つまり、人間が餓死しないためには、農業をして動物を殺すことも許容されるのである。

人間の生存権と他の動物の生存権が両立しえないとき、人間の生存権を優先してよいだろう。他方で、他の動物の生存権を侵害する必要があるときには、他の動物の生存権を尊重すべきである。

さてこれまで、倫理的菜食主義者に対するレステルの批判について長々と述べてきた。しかしながら、こうした批判の最後にレステルは、批判とは趣の異なることを 2 点述べている。1 つは、こうである。

肉を食べたくないと思うのは自由だし難なく受け容れられるが、それを多数派が採るべき倫理的選択とするのは無理がある。(82～83 頁)

すでに述べたように、レステルの主張の特徴は、肉食がたんに許容されるというのではなくして、肉食が義務だというのであった。しかし、この引用では、肉食が義務ではないと認めている。どういうことか。レステルが最初に述べているように、レステルが批判するのは、菜食主義者ではなくて、倫理的菜食主義者、「原理主義的なベジタリアン」(14 頁)である。

では、「原理主義的なベジタリアン」とは、どういう者か。レステルは、次のように書いている。

一部の倫理的ベジタリアン(全員ではないし、たぶん大多数でもない)は疑うことなく自らの信念を最重要とし、この信念が世界の隅々まで広がるべきだと考える強固な原理主義者に見做せるだろう。これらのベジタリアンは自分が肉食を放棄するだけでは満足せず、世界中の人々に自分と同じ行動を求め、時には強引な手法をとることも躊躇しない。私には、攻撃的になりがちなこの闘争主義が、西洋の倫理的菜食主義の特徴であるように思えるのだ。(119~120 頁)

ここで「強引な手法」ということで2つのことが考えられる。第1に、暴力・実力による動物解放である。しかし、そのような運動方法は、すでに信用を失っている。第2に考えられるのは、議会での立法化である。議会で法律を通すことによって、動物倫理をたんなる道徳に留めるのではなくして、動物倫理に強制力をもたせるのである。たしかに、このような運動は、道徳を立法化しようというのだから、いささか道徳主義的ではある。しかし、道徳主義的だからといって、ただちにダメだということにもならない。人々の道徳的成長は、政治の正当な目的でありうるからである。

批判とは趣のことなる、もう1つの点は、こうである。

だがゲイリー・スナイダーが依拠する仏教は、あらゆる苦痛を根絶するのは不可能だと認めており、それを実行しようなどとはゆめゆめ要求しない。仏教はわれわれが成しうるかぎり、そして成すことが理に適い、とりわけ不要なあらゆる苦痛を取り除くかぎりにおいて、苦痛軽減の願いに同意するのだ。(83 頁)

ここでレステルは、仏教を肯定的に評価しているように思われる。しかし、すでに述べたように、避けられない苦痛は仕方がないにしても、不要な虐待を止めろというのが、倫理

的菜食主義者の願いでもある。とすれば、レステルは、倫理的菜食主義者にも賛同しているように思われる。

以上が、『肉食の哲学』の前半の批評である。

第2節、レステルの倫理的肉食主義

後半でレステルは、自らの倫理的、積極的肉食論を展開する。それをこれから見ていこう。レステルはまず自らが勧める倫理的肉食主義者を「ちんぴら肉食者」(87 頁) から区別する。「ちんぴら肉食者」についてレステルは、次のように述べる。

肉食者は一般に自らの行動をうまく正当化できていない。彼らがするのはほとんどの場合恥知らずな主張であり、その防御の姿勢は対決相手のベジタリアンがくり広げる攻撃の前では説得力も効果もない。(86～87 頁)

このように「ちんぴら肉食者」に対してレステルはなかなか手厳しい。そのことを承知の上でレステルは自らの倫理的肉食論を展開する。

レステルの倫理的肉食主義の根幹にあるのは、「生物間の相互関係と交換の普遍的原則」(87 頁) である。この普遍的原則を私は捕食のことだと述べた。それをレステルはさらに詳しく「贈与と返礼のシステム」(94 頁) と述べる。これがどういうことかを、レステルはアルギンコン族の倫理的肉食を例として説明する。長いけれども、レステルから引用しよう。

彼ら〔アルギンコン族〕にとっての問題は動物を殺すことでなく、動物をどうやって殺すか、なぜ殺すか、さらにその死骸をどうするかだと言う。食うための動物殺害は許されるが、それでも死に至るまでの苦痛が極力少ないことが条件だ。さらにアルゴンキン族においては、動物との相互関係と貸し借りのプロセスに参加せねばならず、またその身体から最大限の食物を得られなければならない。この最後の点は根本に関わる。すなわち食われた動物は、彼のうちの食用可能なすべてが確かに食われ、使用可能なすべてが使用されて初めて、正確な意味での食われた動物なのだ。だから重要なのは動物を殺すことではなく、不要な苦しみを与えずに殺すことであり、殺された動物をまったく無駄にしないということである。結果、戯れに動物を殺したり、殺処分することはアルゴン

キン族の目には許しがたいものと映るのだ。(93～94 頁)

この贈与と返礼のシステムをレステルは「契約」とも呼び、「拘束力の強い義務が遵守される場合のみ」動物を殺したり食べたりすることができるという(94 頁)。この契約の義務部分は、「苦痛が極力少ない」ように動物を殺し、動物の「食用可能なすべて」を食べ、「使用可能なすべて」を使用することである。権利部分は、動物を殺し食べることができるということと思われる。この権利と義務を、すでに述べたように、レステルは「贈与と返礼」とも呼ぶ。つまり動物は、その身体をアルギンコン族に贈与してくれる。それに対してアルギンコン族は、一定の作法を返礼として返す。

この贈与と返礼のシステムをレステルはさらに「依存のシステム」だと述べる。レステルは次のように述べる。

世界においてエネルギーは循環し、このよき循環が世界に調和と正義をもたらすとも考えられるのだ。各々の動物は他の生存の条件であり、捕食の普遍化はこの調和のひとつの原則となる。(96 頁)

この依存関係は、一方的ではなくて相互的である。狼と鹿を例にとると分かりやすいだろう。狼は鹿がいなくなれば困るし、鹿も狼がいなくなれば困る。その意味で、狼の生存が鹿に依存するだけではなくて、鹿の生存も狼に依存する。ここでは生態系の維持にとって、狼が鹿を食べすぎないことが重要であるのみならず、食べること(食べなさすぎないこと)も重要なのである。このようにレステルは、自らの倫理的主張の根拠を生態系の調和におくようである。

捕食の意義についてレステルは次のように述べる。

ヒトと動物の依存関係は、それほど特別なものではない。すべての動物が相互に依存し合わずにはいないのだ。そこに生の本質をなす原則がある。この認識は二重の利点を持っている。この認識は他の生き物に負っているすべてを思い起こさせ、採取していい限界、特に量的限界を設定する。必要以上に捕獲することは論外だ。すなわちどのような捕食もシステムを危険に陥れてはならない。食うとはしたがって依存契約を結ぶことのみならず、自らもそのシステムの内にあると認めることだ。(98 頁)

この認識は、「謙虚な態度」(98 頁)につながる。ここに肉食の意義があるようである。つまり肉食者は、動物との契約関係に入ることによって、義務を引き受け倫理的になる。

なるほど、レステルのいう相互依存の倫理は、狩猟採集社会においては理解できる。そうした社会では、人間は生態系との相互依存の関係にあるから、取りすぎてはならない。しかし、私たちの社会は、東洋の社会も西洋の社会も、もうずっと昔に農耕や牧畜の社会に変わっている。農耕や牧畜では基本的に取りすぎることがない。稲でも小麦でも豚でも牛でも、どんどん増えてくれるからである。それだけではない。人間が動物を捕食しなくても、生態系は崩壊しない。実際に日本では何百年間も人間が動物をほとんど捕食しなかったけれども、自然界の生態系は適切に維持されていたと考えられる。とはいえ、批判を急ぎすぎたかもしれない。もう少しレステルに耳を傾けてみよう。

レステルにとって、生態系の中での相互依存があるべき姿なので、そこからの逸脱が2通りに考えられる。

捕食の倫理というこの観点においては、どうあっても避けねばならない重大な誤りがふたつある。ひとつ目はこのシステムから逃れようとするものであり、ふたつ目はこれを乱用することである。システムから逃れるということは、所有欲からであれ(許される以上のものを取る)、傲慢からであれ(自分を生き物の上位に立つ存在と見做し、すべての生き物が例外なく連関しているシステムに属さないと考える)、その形態を尊重しないということだ。生の営みの外に身を置こうとするベジタリアンは、つまるところ傲慢の罪を犯している。一方で、根源的依存とはほど遠く、肉を過剰に摂取している現代西洋社会の超肉食者は所有欲の罪を犯しているのだ。(103～104 頁)

ここでのレステルの叙述は、少し混乱しているように見える。というのは、超肉食者は、2つ目の乱用の誤りを犯していると同時に、1つ目のシステムから逃れる誤りをも犯しているように見えるからである。2つ目の乱用の誤りは、1つ目のシステムから逃れる誤りの特殊形態ということであろうか。

いずれにせよ、レステルはここで、倫理的菜食主義者だけではなくて超肉食者をも批判している。では、超肉食者とは何者か。ここでレステルは、倫理的菜食主義者と区別して、

政治的菜食主義者を立てる。

政治的ベジタリアンは、巨大な人口を持つ集団が恒常的な肉食をおこなうのは破滅的に他ならず、端的に言って常軌を逸していると説明する。こうした主張を見過ごすわけにはいかない。工業的畜産は恥ずべきものだという政治的ベジタリアンの見解には、肉食者としてももちろん同意する。……豊かな国において肉食は習慣に堕しており、そこにはもはや動物への追悼や動物との一体化という側面はない。政治的ベジタリアンの主張はしたがって倫理的ベジタリアンの議論とは関係なく、その報告は肉食者も認めなくてはならない忌まわしい真実に基づいている。(111 頁)

先進国における過剰な肉食も限界のひとつで、工業的畜産の脅威とそれによる環境破壊の要因となる。倫理的ベジタリアンの態度が支持できないのは確かだとして、逆に今日政治的ベジタリアンの態度は、生きる上での必要として避けられないものである。(123 頁)

政治的菜食主義者が批判するものこそ、工業的畜産であり超肉食者である。政治的菜食主義者による批判の要点は2つである。1つは、工業的畜産が環境にとって破壊的だということである。もう1つは、超肉食者の肉食はたんなる慣習であって「動物への追悼や動物との一体化」がないということである。

工業的畜産を批判する点において、レステルの政治的菜食主義は、本書評の初めでも述べたように動物福祉論に近い。実際にレステルは、「肉食を何も全廃せずとも徹底した削減を目指して闘うことはできる」(111 頁)と述べる。もちろん、レステルの立場が動物福祉論と違うのは、肉食に積極的な意義を認める点である。それが、すぐ上で述べた批判の2つ目の要点と関係する。この2つの要点を合わせて、レステルは次のように述べる。

出所不明な肉の無反省な摂取と完全なる菜食の間に、じつは現在の西欧諸国ではベジタリアンも肉食主義者もまだ真剣に模索していない道が存在する。それは肉食の抑制と儀礼化だ。別の言い方をすれば、毎回の肉食を儀式さらには追悼と見做し、適切に扱われた動物由来の肉のみを受け容れ、肉の摂取をこうした機会に限定することである。(113 頁)

レステルは具体的な数値を挙げていないけれども、文面からは肉の消費をかなり劇的に減らすべきだと主張しているように思われる。

かくしてレステルは、次のようにも述べる。

私自身は同類とされる大多数の肉食者より、自分の知る大多数のベジタリアンの方によほど近いと感じている（14 頁）。

だから、レステルの本書は決して「反ベジタリアン論」（14 頁）ではない。その意味でレステルの立場は、「倫理的肉食」というよりも「政治的菜食主義」と呼ぶほうが適切である。ただし、レステルの政治的菜食主義には、すでに述べたように 2 面がある。1 つは、工業的畜産を環境問題として批判する点である。この点で、レステルの菜食主義は「政治的」である。もう 1 つは、個人の内面に深く入り込み、人間に「謙虚な態度」を要求する。この点で、レステルの立場は「倫理的」であり、人間が倫理的であるために肉食が必要だというのが、レステルの所論の特徴である。

さて、レステルは、自らの倫理的肉食に対する反論を 3 つ想定して論じている。その中では最初の反論が決定的と思われ、後の 2 つはそれほど重要と思われないので、私の批評も最初の反論に限定する。この最初の反論は、こういうものである。

状況は植物にとってもまったく同じだ……われわれは野菜、穀類、果実との根源的な近さを確認する（105～106 頁）。

これだけでは少し分かりにくいので、説明したい。動物と同じように、植物も生きている。そして牛のような草食動物は、食べられる草との相互依存関係にある。であれば、人間も、動物との相互依存関係に入って義務を負い、謙虚な態度になることができるように、植物との相互依存関係に入って義務を負い、謙虚な態度になることができる。そうであれば、人間が倫理的であるために、動物を食べる必要はない。そういう反論だと思われる。この反論に対し、レステルの再反論は、事実において倫理的菜食主義者はそのように謙虚な態度をとらないというものである（106 頁）。実際に、レステルによれば、倫理的菜食主義者は「植物を道具化し」（95 頁）、物同然に扱う。ここでレステルは、菜食主義者が植物との相互依存関係に入って義務を負い、謙虚な態度になることができることを認めてい

る。レステルの不満は、現実の倫理的菜食主義者がそうしていない、ということである。

同じことは、肉食者についても言える。肉食者は、動物との相互依存関係に入って義務を負い、謙虚な態度になることができる。しかし、現実の肉食者——レステルが「超肉食者」と呼ぶ人たち——がそうしていないことは、レステルも認めている。ということは、肉食と謙虚な態度との結びつきは必然的でない。だからこそレステルは、現実の肉食者に対して、倫理的肉食者になれと要求するのだろう。そうであればレステルは、現実の倫理的菜食主義者に対しても、植物との相互依存関係に入って義務を負い、謙虚な態度になれと要求することができるだろう。

実際に、倫理的菜食主義者に対するレステルの主たる不満は、無垢の態度、無垢でありえないにもかかわらず倫理的菜食者が無垢の態度をとること、そこから生まれる傲慢であると思われる。無垢でありえないことについてレステルは、次のように述べる。

無垢であり続けながら生きられるとの思い込みは、単なる幻想である。(13 頁)
世界には「無償の食事」というものはない……すなわち動物でありたいと願うのなら、動物であることが意味する生死のサイクルに関与しないわけにはいかない (63～64 頁)。

確認しておこう。たとえ 1 人の人間が個人として動物を殺さなかったとしても、レステルが指摘するように、農業において昆虫などの動物に危害を加えないことは難しい。また私たちは現代社会の中で医療を享受しているわけだから、すでに動物実験の恩恵に浴している。さらに私たちは植物を殺して食べないでは生きていけない。だから私たちは無垢でありえない。レステルのこの指摘は正しい。

無垢でありえないにもかかわらず、倫理的菜食主義者は自分が無垢だと信じ込んで傲慢になる。それに対してレステルは私たち人間に、倫理的になること、謙虚な態度を要求する。このように見てくると、レステルの中心関心は、人間の心のあり方、徳性であることが分かる。つまり人間にとって傲慢であることは悪く、謙虚な態度がよいことなのである。このレステルの徳論には賛同できる。

しかしながら動物にとってはどうか。動物にとっては、謙虚な人間に殺されるよりは、たとえ人間が傲慢であっても、人間に殺されないほうがましだろう。たしかに、動物をた

んなる物としか見ない傲慢な人間に殺されるよりは、謙虚な人間に殺されるほうがましかもしれない。けれども一番よいのは、人間が自分と動物の共通性を自覚し、動物の権利を尊重する謙虚な姿勢によって、動物が人間に殺されないことである。